

つつじ読書会 12月7日(土)

トミー・オレンジ(1982-)『ゼアゼア There There』(2018)

●所感

都市インディアンの物語だが、“都市インディアン”という呼称を知らなかった。植民地支配によって根こぎにされ、アメリカ市民ピープル(=近代)に馴致させられる(同化し、吸収し、消し去られる)ネイティブの物語。

根こぎ

p.52「そこにはそこがない」There is no there there

アメリカ大陸のあらゆるところで、開発が過剰に進み、祖先の大地が葬り去られ、ガラスやコンクリートや電線や鉄鋼が記憶を被い尽くしてきた。そこにはそこがない。

私が当初もっとも感情移入した登場人物はディーン・オクセンディーンで、彼が、都市インディアンの歴史を想起して、インディアンの“誇り”や“尊さ”を取り戻し、大団円を迎える物語だと思っていた。ところが、そうは問屋が卸さなかった。

彼ら都市インディアンは、インディアンであるにもかかわらず、いざインディアンであろうとすると、「インディアンみたいな格好をしている、とオーヴィルは思う(p.157)」

そして、結末のパウワウはとても息苦しく、読後感はガルシア＝マルケス(1924-2017)『百年の孤独』(1967)を想起させた。

アウレリャーノ・ブエンディアー大佐の疑念、パウワウの理不尽さ

自由派と保守派の戦いのはずだったが、そのうち、何のために戦っているのかわからなくなったアウレリャーノ・ブエンディアー大佐は「ひとつ教えてくれ。何のためにきみは戦っているのかね?」(ガルシア＝マルケス『百年の孤独』p.107 新潮社)と、洩らしていたのだった。この内戦は、支配者によって仕組まれた“代理”戦争ではないかと疑念に思ったのだ。

同様に、パウワウの銃乱射は、「奪い取って奪い取って奪い取って奪い取った人々」(p.272)によって囲い込まれ、追いつめられた挙句の“都市インディアン”の“代理”戦争だと感じられる。あまりにも理不尽で、銃口を向けるべき本当の相手は誰か?と、考えてしまった。この“代理”戦争は、現在のガザ危機も想起させる。

●前回の議論をふまえて、と、「ディーンオクセンディーン」に感情移入した訳

前回のH・Dソロー(1817-62)『森の生活 ウォールデン』の分析で、「近代」は“お仕着せがましく同じ服を着せる”とした。これに異議を唱えることは、一見すると孤絶をもたらすが、しかし“個”は、必ずしも脆弱なものではなく、“個”にいたるまでのさまざまな来歴が連なった結節点としてあり、この来歴は、近代に対して異議申し立てする“個”を勇気づける、とした。(たとえば、ソローにとっては“自然”こそが、来歴のひとつであり、森の生活を実践させていた)

前回、ご意見をいただいたときに想起したのは、遠藤周作『深い河』の童話作家沼田が描く八代海の童話。

新吉のお祖父さんも八代海に面した村に住んでいました。お祖父さんは八年前に亡くなりましたが、元気な頃は烏賊つりの名人といわれ、村でも人気者の漁師でした。(中略)「お祖父ちゃんはこの海で魚になって生きとるね」とお祖母ちゃんは真面目に新吉に教えました。「この海が、わしらが死んだあと住む世じゃもんね。お祖母ちゃんもいつか息を引きとったら、この海に流してもろうて、魚になって、お祖父ちゃん

んに会えるんじゃない」/ このあと、村の近くに大きな工場がたって、その廃液が海をよごし、魚を苦しめ、漁村の人を病気にする話になるのだが、それは童話にしてはあまりに辛い話になるので、切ってしまった。村人たちがその工場を訴えたのは、病気の原因を作る廃液を流したことでだけでなく、祖先や亡くなった両親や親類や兄弟が魚になって生き、やがては彼らもそこに生れかわる次の世を破壊したことだった。だが、次の世などを信じないジャーナリズムは、そんなことより環境破壊のことや病気のことに重点をかけて報じたことも沼田は童話に織りこみたかった。(p.246)

このような八代海の童話が活きたものであったなら、チッソはなおさらに、不知火海へ有機水銀を垂れ流すことはできなかったのではないか。高度経済成長(ガラスやコンクリートや電線や鉄鋼が記憶を被い尽くす過剰な開発)の影で、水俣の人々の祖先の大地は(公害によって)葬り去られる。これは、近代日本のThereThere とさえいえるのではないか。

したがって、都市インディアンにとっても、インディアンであることの来歴は、アメリカという白人社会において、マイノリティとして生きる人々を勇気づけるものであるはずだし、白人社会もインディアンも物語をかえりみれば、なおさらにすることはできないはず。ところが、『ゼアゼア』で浮かびあがるのは、近代による、より狡猾で執拗な来歴の根こぎだったといえる。

もしジェノサイドや奴隷制の恩恵を受けた祖先を持つ家に生まれるほど幸運であったら、知らなければ知らないほどに罪を免れ無垢でいられると思うのかもしれない。だから当然、探し求めず、丹念に調べず、眠れるトラの周囲は慎重に歩こうとする。名字以上のことは見ないようにする。名字を遡ってみると、もしかすると、自分の祖先の歩んだ道が黄金で舗装されていたのか、あるいは罫がいくつも仕掛けられていたのか、分かるかもしれない。(p.179 幕間)

つまり、近代(資本主義、国家システム)には、そこに立ち返ったり、想起することを困難にするような徹底的な来歴の根こぎがある。逆に、そのような来歴は、むしろ足枷として、近代化を妨げる旧態依然とした古い因習としても表れるやもしれない(クモが秘める家と罫???)。完全にアメリカ人に同化してしまったほうが、角が立たないといえるのか。あるいは、「自分たちのやり方を作っちゃだめなの?」とロニーはいう。(p.169)

●どのように来歴と向き合うべきだろうか。

スピノザの自由をヒントに

自己の本性の必然性のみによって存在し・自己自身のみによって行動に決定されるものは自由であると言われる。これに反してある一定の様式において存在し・作用するように他から決定されるものは必然的である、あるいはむしろ強制されると言われる。(第一部定義七)

魚には水の中で泳いで生きるという条件が課されています。それは確かに制約であり必然性です。ですが魚が自由になるとは、その必然性を逃れることではありません。魚は水の中で泳いで生きるという必然性にうまく従って生きることができた時にこそ、その力を余すところなく発揮できる。魚を陸にあげれば死んでしまいます。人間の身体や精神にも、これと同じような必然性があるということです。(p.96)

言い換えると、インディアンであることは、制約であり必然性だが、インディアンとして生きるという必然性にうまく従って生きることができた時にこそ、その力を余すところなく発揮できると信じたい。